

桜土手古墳展示館開館 20 周年記念特別展

発掘された秦野の古墳

平成 22 年 10 月 9 日 (土) ~ 12 月 5 日 (日)

場所：桜土手古墳展示館ミュージアムプロムナード



はじめに

神奈川県指定史跡二子塚古墳出土銀装大刀

桜土手古墳展示館は、今年の 11 月 3 日で開館 20 周年を迎えます。当館ではかつて、「西相模の古墳(平成 4 年)」、「西湘の横穴墓(平成 6 年)」といった企画展示を行っていますが、ここしばらくは他の時代をテーマにした特別展を多く開催してきました。

そこで今年度は、20 年を一つの節目として原点に立ちかえるという意味で、特別展「発掘された秦野の古墳」を開催することといたしました。この 20 年間に

秦野市内で発掘された古墳・横穴墓出土の新資料を中心にご紹介いたしますが、特に本年、7 月に出土した神奈川県指定史跡二子塚古墳出土の銀装大刀は、保存処理前最後の公開となります。また、桜土手古墳群第 13 号墳出土遺物も専修大学のご協力を得まして、当館での初展示となりました。

この機会に、秦野の古墳について、あらためて興味・関心を持っていただければ幸いです。

大根地区



★二子塚古墳

金目川左岸の台地上、標高 75m 付近の下大槻字二タ子に所在する横穴式石室を有する前方後円墳で、周辺には下大槻欠上遺跡、広畑古墳群、岩井戸・欠ノ上横穴墓群が所在します。

墳丘は全長 46m、後円部の東西方向 33m、南北 26m、前方部の幅 25m になります。横穴式石室は後円部にあり、南東方向に入口が設けられています。

石室の奥壁部分が根こそぎ撤去されているため詳細はわかりませんが、玄室の幅は 1.5m、前庭部から玄室の奥壁までが 9m、石室の平面形は片袖式と推定しています。床には礫が敷いてありましたが、追葬は確認できませんでした。なお、前庭部の状況はわかりません。

出土遺物は全形の銀装大刀、象嵌を持つ鞘尻金具、鉄鏃、耳環、玉類、須恵器等があります。

銀装大刀は玄室の北東の側壁の際、礫床の上で出土しています。崩れた壁

の石の下敷きになっていたため、5つに分割されていました。また、象嵌を持つ鞘尻金具は玄室中央付近の礫床の上にあり、近くでは耳環が発見されていません。

★下大槻欠上遺跡第1号墳



標高 60m 付近の下大槻字欠ノ上に所在する横穴式石室を有する円墳です。

墳丘の直径は 17.5m、周溝の幅が 2.6m、周溝を含む古墳の直径は 22.5m で、葺石の一部が残っていました。

無袖式の横穴式石室は南南西に入口が設けられています。前庭部の長さは 3.9m、羨門から奥壁までの長さ 5.3m、奥壁の幅 1.3m になります。

前庭部は周溝に向かって撥(ばち)のように広がっており、両側に最大 4 段の石積が残っていました。石室は羨門から奥壁に向かって緩やかに広がっており、側壁には最大 5 段の石積が残りましたが、両壁の一部が大きく崩されていました。

奥壁は幅 40~50 cm の 3 個の石を据え、その上に小ぶりの石を積んでいます。床には礫が敷いてありましたが、追葬は確

認できませんでした。

遺物は、耳環、玉類のほか土師器坏が検出されたにとどまりました。

南地区

★平沢鈴張遺跡第1号墳



標高 130m付近の鈴張町に所在する横穴式石室を有する円墳です。水無川右岸の台地上に立地し、周辺には、清正公塚古墳のほか、消滅した古墳もあるようです。

墳丘の直径は 16.2m、周溝の幅が推定 3.6m、周溝を含む古墳の直径は 23.4mになります。葺石と墳丘内石積の一部が残っており、二段築成の墳丘であったと考えられます。無袖式の横穴式石室は南東に入口が設けられています。前庭部の長さは推定で 3.2m、羨門から奥壁までの長さ 4.9m、奥壁の幅 1.4m になります。

前庭部は周溝に向かってハ字状に広がっており、両側には最大7段の石積が残っていました。羨道と玄室の区別は側

壁の石積により区別ができます。側壁には最大5段の石積が残っていましたが、東壁の一部が大きく崩れていました。奥壁は幅 1.45m、高さ 1.58m、最大厚 0.5m の 1 個の石を据えています。床には礫が敷いてありましたが、追葬は確認できませんでした。

出土遺物はガラス小玉 24 個にとどまり、盗掘を受けているようです。

★尾尻沢山横穴墓群



標高約 100～103m の八幡山と呼ばれる小丘陵の北側斜面に所在します。

これまで 3 度の発掘調査がおこなわれ、合計 11 基が発見されていますが、各横穴墓は、同一の等高線上に位置せず、数mの比高差をもち築かれています。平面形は、羨道と玄室の区別が明瞭なものと不明瞭なものがあります。

平成 18 年の調査で確認された第 2 号横穴墓は、羨門から奥壁まで全長 3.86m を測り、平面形からは羨道と玄室の区別が不明瞭であるものの、床面の段差や川原石の配列により、その区別を意識しています。

出土遺物には、須恵器のフラスコ形

瓶、坏蓋、提瓶や直刀、鏢(つば)、刀子(とうす)、鉄鏃といった鉄製品の他に耳環、ガラス玉類の装身具があります。

東地区

★落合背戸横穴墓群



大字落合の延沢川によって浸食された急傾斜地に存在した横穴墓群で、護岸整備工事にともなって、平成3年に11基が調査されています。

羨門部に横穴式石室を思わせる石積施設を持つものと、石積施設を持たない小型の玄室のものに大別でき、掘削の切り合いから、後者のほうが新しいものであることがわかりました。前者に見られる石積施設は、市内では岩井戸横穴墓群でも確認されており、伊勢原市や厚木市、座間市のほか、県外では東京都の多摩地方にまで類例が見られます。

墓道や前庭部から土師器・須恵器が出土していますが、玄室内部の遺物は乏しく、刀子1点と鉄製品の断欠が数点出土したにとどまっています。

★金目原古墳群第1号墳



標高 170m付近の寺山字金目原に所在する横穴式石室を有する円墳です。金目川左岸の台地上に立地し、5基の古墳から構成されています。付近には道永塚古墳群が所在します。

墳丘の直径は 15.8m、周溝の幅が 1.5mで、周溝を含む古墳の直径は 19.4mになります。両袖式の横穴式石室は南西に入口が設けられています。前庭部の長さは 3.6m、羨門から奥壁までの長さ 5.5m、奥壁の幅 1.7mになります。

前庭部は周溝に向かって真っ直ぐに伸びており、両側には2~3段の石積が残っていました。

石室は羨道と玄室の区別は袖により区別ができます。羨門・玄門の幅は 1.0mで、奥壁に向かって真っ直ぐに延びています。奥壁は幅 1.7m、高さ 1.0m、最大厚 0.6mの1個の石を据えています。なお、この上にほぼ同じ大きさの石がありました。床には礫が敷いてありましたが、追葬は確認できませんでした。

出土遺物は、玉類、鉄鏃、刀子、須恵器長頸瓶でした。

★金目原古墳群第3号墳



第1号墳の北東 37mに位置します。

墳丘の直径は 12.6m、周溝の幅が 1.7mで、周溝を含む古墳の直径は 16.0 mになります。無袖式の横穴式石室は南南西に入口が設けられています。前庭部の長さ 2.0m、羨門から奥壁までの長さ 4.9m、奥壁の幅 1.0mになります。

前庭部は周溝に向かって真っ直ぐに伸びていますが、石積は確認できませんでした。

石室は羨道と玄室の区別が明瞭ではなく、羨門から奥壁に向かって真っ直ぐに延びています。

奥壁は幅 1.3m、高さ 0.8m、最大厚 0.5mの1個の石を据えています。なお、この上にひと回り小さい石がありました。床には礫が敷いてありましたが、追葬は確認できませんでした。

出土遺物は、直刀、耳環、鉄鏃、玉類でした。

★桃木原古墳群第1号墳



標高 200m付近の堀山下字東向ヶ谷戸に所在する横穴式石室を有する円墳です。水無川右岸の台地上に立地し、周辺には桜土手古墳群が所在します。

墳丘の直径は 14.4m、周溝の幅が 1.5mで、周溝を含む古墳の直径は 17.4 mになります。無袖式の横穴式石室は南に入口が設けられています。前庭部の長さ 1.9m、羨門から奥壁までの長さ 5.4m、奥壁の幅 0.9mになります。

前庭部は周溝に向かって真っ直ぐに伸びており、両側に2～3段の石積が残っていました。石室は羨門が 0.8mと狭いものの幅 1.1mで奥壁に向かって真っ直ぐに延びていますが、西側の壁は奥壁の手前 0.5mのところから折れ曲がり、狭くなります。石室側壁は最高で 7 段の石積が残っていました。

奥壁は幅 0.8m、高さ 0.7m、最大厚 0.4mの 1 個の石を据えています。床には礫が敷いてあり、数回にわたる追葬が

西地区

行われています。

出土遺物は、耳環、鉄鏃、玉類、須恵器の横瓶・短頸壺・坏でした。

★桜土手古墳群第 13 号墳



秦野盆地を流れる水無川の南岸に 35 基で構成されていた桜土手古墳群のほぼ中央、標高 170m ほどの平坦地に位置します。

日産車体工場建設工事に先立ち、昭和 49 年から昭和 52 年にかけて発掘調査が行われ、周溝を含めた直径が 19m 前後の二段築成の墳丘に、長さ約 5m の無袖の横穴式石室を持つ古墳であることが確認されました。

出土遺物は土師器、須恵器、鉄鏃、直刀、装身具などで、特に坏や長頸瓶が目立ちます。

本古墳から 4m ほど離れたところには、第 10 号墳や第 14 号墳でみられた埋葬

施設と考えられる小石室が検出されており、そこに葬られた人々と、古墳に葬られた人物との関連がどうであったのかなど、興味ある問題を提示しています。

おわりに

桜土手古墳群は 35 基の円墳からなり、県内でも残りのよい古墳群として注目されてきましたが、秦野市内には「塚」という文字が付く小字名が多く見られ、かつてはさらに多くの古墳が市内に存在していたものと思われます。また、古墳の横穴式石室のかわりに、急傾斜地に横穴を掘って墓穴とする横穴墓も数多く存在しています。

秦野市内に分布する古墳は、唯一の前方後円墳である二子塚古墳を除き、すべてが円墳で、おおむね 6 世紀後半から 8 世紀初頭の古墳時代の終わりごろに造られたもので、有力な家長とその家族の墓所であると考えられます。

前期古墳が市内に見られないことから、古代における秦野の開発は平塚などの周辺地域よりやや遅れて、6 世紀以降に着手されたものとみてよいでしょう。

展示協力者：国立歴史民俗博物館、専修大学
安藤文一氏、永嶋正春氏、土生田純之氏

開館 20 周年記念特別展「発掘された秦野の古墳」

発行：平成 22 年 10 月 9 日

編集：〒259-1304 神奈川県秦野市 380-3 秦野市立桜土手古墳展示館

Tel. 0463-87-5542 FAX 0463-87-5794